

説教 『私の奥の奥で働く御言葉』 山本 護 牧師
聖書 詩編 8：4～5／ヘブライ人への手紙 4：12～13

「神の御前では隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されている(ヘブライ 4:13a)」。隅々まで御見通しなら、無理して敬虔ぶることもなかろう。適度に勤勉で、適度に信仰的で、時には少くらしい狡い私でいいではないか。だが「そのままでいいんだよ」的な容認は、緊張を強いる社会に求められる反面、民の統制が推し進められている現代日本ではその甘さが危うい。

「この神に対して、わたしたちは自分のことを申し述べねばならない(4:13b)」。すべてさらけ出されているのに、なぜ自分のことを申し述べる必要があるのか。と理屈をつけ、命じられたことから逃れたい。どうしてか。神にはすべてが御見通しでも、己の陳腐さを、自分で見たくないからだ。

宗教改革者らのことを考えてみよう。M.ルターには「明日世が減ぶとしても今日私は林檎の木を植える」と語った逸話がある。J.カルヴァンは「救われる者と滅びる者は神が決めていて人間の信仰も努力も関係ない」と徹底した予定説を唱える。そしてJ.ウェスレーは「信仰の有無を問わず万人が救われる」と万人救済を説いた。それぞれ随分違うが、救いのことは神に全権があり、人間が働きかける余地はないということに一致している。後代につくられた権威を認めない、宗教改革らしい信仰だ。

ここで一つの疑問が浮かぶ。ではなぜ伝道などする必要があるのか。救われるにせよ滅びるにせよ、神に全権があるなら、頑張っても怠けても結果は変わらないではないか。そうだと変わらない。しかし宗教改革者らは働きに働き、命をかけてキリストの福音を宣べ伝えた。なぜなのか。「無償で救われる」という十字架の恵みを知らない人がいるからだ。「救いも滅びも含めたすべてが神の御手にある」ことを知らずに、人間による権威や権力の、甘言や脅しに屈している民が少なくないからだ。

「神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができる(4:12)」。認知している自己像のさらに奥の奥で「神の言葉」は生きて働かれる。信仰生活の中で私たちは、そんな神の言葉の働きをこの身に覚えることがある。「すべてのものが神の前に裸である(4:13)」ことを思い知らされ、私たちは「自分のことを申し述べ(4:13)」ざるをえなくなる。その自然な独白を、抑えてはならない。

「あなたの天を、あなたの指の業を、わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの(詩編 8:4)。宇宙を創造しその隅々を統べ給う神。「そのあなたが御心に留めてくださるとは、人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは(8:5)」。人間とか人の子とか、他人事のように語っているが、詩人にとっては自らの実感。もしくは身近な者たちのことなのだ。宇宙の大きさと、私の小さな人生は、神のまなざしによって同じように顧みられている。

「精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通す(ヘブライ 4:12)」がごとくに、私たちは知られ尽くされている。他者と似たり寄ったりには判断されえない。宇宙的な深さで私たちは見通され、守られている。その真実を御前に申し述べ、救いと希望を、まだ出会っていない未知の兄弟に宣べ伝える。



【おまけのひとこと】

私の自然は御心に忠実でも 人為がそれと衝突して摩擦熱を発生している これが宇宙と同程度に丁寧にも顧みられている なんと細やかな御心であろうか どういうわけか私は 自ら跪いていた